



|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 『本間久雄日記』を読む (3)   |
| Author(s)   | 岡崎, 一   |
| Citation    | 人文学報 表象文化論(461): 1-26   |
| Issue Date  | 2012-03-30  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/10748/5350">http://hdl.handle.net/10748/5350</a> |
| Rights      |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

首都大学東京

<http://www.tmu.ac.jp/>

## 『本間久雄日記』を読む(3)

岡崎 一

## IV. 古書

本間の明治文学史研究の基礎となっていたものは、当時の資料、即ち『日記』執筆の時点でも既に(稀覯本のため場合によっては馬鹿高い)古書となっていた類のものである。この件に関しては、「解説」43-45に要領良く纏められている。例えば、勝本清一郎が(笹川臨風宛)高山樗牛書簡を入手したことについて“内容は別に面白からねど樗牛の筆跡は珍らしきものなればいさゝか羨ましき心地す。”(140)、巖本善治の『女学雑誌』について“女学雑誌一冊片々たる一小誌を数名にてクジ引きせりとか。不思議なる世の中なり。”(143)、田島象二『西國烈女傳』について“前々より美なる一本を所蔵せりしが、その値の余りに安き[70円]にいさゝか腹立たしくなり”再購入している(150)というように、古書収集——“好きな途”(210)——に伴う本間の喜怒哀楽は、筆者には余りにも手に取るように解るので、敷衍は不要であろう。以後、『東京古書組合五十年史』(東京都古書籍商業協同組合、1974年)——『五十年史』と略記——に拠り、『日記』を分析してみる。

本間は古書類を大別して古書(即売)展(目録)と古書店(各店目録および『日本古書通信』[380、526、621]——略称『古通』——掲載目録)の2つの経路で入手していた(因みに『日記』が執筆される前年の“昭和三十三年の目録発行数は戦前戦後を通じてピークに達して”[『五十年史』591]いた)。古書展(デパート古書展を含む)にしても古書店にしても、筆者には馴染み深い名前が『日記』には現れている。例えば、書窓展(通称“まど展”、1956年7月に東京古書会館で発足)、ぐろりや展(1949年4月に東京古書会館で発足)、新興展(1939年12月に東京図書倶楽部で発足)、愛書展(1955年1月に東京古書会館で発足)、神田神保町を主とする都内の古書店といった具合である。(因みに筆者は以前は古書店にも頻繁に出かけたが、現在では全く行くことはなく、[古書会館の]古書展にしか行かない。)『日記』記載の“古書会館”とは東京古書会館(その所在地を本間は“駿河台”[325、407]と書いているが、これは江戸時代の地図を見れば一目瞭然であるように“駿河台小川町”が隣接していることによるもので、戦前の東京図書倶楽部[1916年8月—1945年4月]時代を含めて、所在地は基本的に現在地の[千代田区]神田小川町)のことであるが、これは筆者にも馴染み深い先代の建物(1967年5月竣工、鉄筋コンクリート造り、地上4階地下1階)ではなく、外側の板塀が実にレトロで微笑ま

しい先々代の建物(1948年8月-1966年7月、木造バラック平屋建て[『五十年史』口絵写真参照])のことである。『日記』には例外的に(中央線古書展などが開催される)“荻窪[古物]会館”(247)——現在は(杉並区高円寺北の)西部古書会館(1967年4月竣工)——についての記載もある。都内の他の古書会館——筆者には(廉価のため)最も馴染み深い(品川区東五反田の)南部古書会館(1970年1月竣工)、(荒川区南千住の)東部古書会館(1966年7月竣工、古書展は開催していない)、(板橋区大谷口北町の)池袋古書会館(1967年5月竣工、古書展は開催していない)——についての記載は、当然ながら『日記』にはない。

本間が(あらかじめ目録から電話注文したり事前運動したりして)古書展(当時は5の日開催)や古書店でどのような文献・書画を購入し(損なっ)ていたのか(また古書店に売却していたのか)は、非常に興味ある問題であるため、以下に購入(し損なった場合もある)・売却した文献・書画の一覧を掲げる。(紙数の関係で出版社・出版社名・出版年・買値は原則として省略。購入・売却以外の記載も原則として省略。本間の表記は往々にして我流・略式で[日記の性質上、本人としては、それで充分だった]、書誌的には必ずしも正確ではないため、あらかじめ[なるべく]補訂した形で示す。副題等も原則として省略した。正確・詳細な表記については、原典、あるいは売却・散逸を免れ幸いにも早稲田大学図書館・実践女子大学図書館に分割収蔵された本間旧蔵書[本間文庫]についての目録——早稲田大学図書館編『本間久雄文庫目録』早稲田大学図書館文庫目録第13輯[早稲田大学図書館、1990年]と実践女子大学図書館編『オスカー・ワイルド文献目録』[実践女子大学図書館、1989年]——、あるいは『日記』本文注釈などを参照されたい。女性関係文献の購入は、実践女子大の女性展用。)

### 1. 古書展(主に古書会館)

昭和34年1月15日(愛書展)：(湯目補隆)『欧米女権』(82-83、波多野<sup>[原]</sup>厳松堂出品) ※“少々風邪気味”のため使いを出す。

昭和34年2月5日：不買(100)

昭和34年2月15日：『女学世界』10余冊、『婦人のおしへ』等(107)

昭和34年2月25日：女性展関連合計5000円ばかり(115) ※“古書店”は“古書展”の誤記。

昭和34年3月5日：雑誌『方寸』その他(120)

昭和34年3月25日(愛書展)：ペーベル(山川菊栄訳)『婦人論 婦人の過去・現在・未来』[アルス]その他数種(131)

昭和34年3月30日(明治古典会展):(香取秀真宛)芥川龍之介書簡、春の屋主人(坪内雄蔵)・二葉亭四迷(長谷川辰之助)『新編浮雲』初版二篇、雑書数種、『早稲田文学』16冊等(135) ※“人々肩々相摩し、狭き会場苦しきことおびた<sup>[2]</sup>し。”という具合だった。

昭和34年4月5日:『女学雑誌』8冊、外国雑誌3~4冊(140)

昭和34年4月15日:『月刊スケッチ』、『新思潮』5号、『明星』午歳(明治39年)1号、『明星』辰歳(明治37年)2号、梶田半古筆『源氏物語』石版刷ハガキ54枚(2帖)、(与謝野晶子)『みだれ髪』4版、『太陽増刊 近時の婦人問題』(大正2年)、『女学雑誌』119号(143) ※頭重のため会場には使いを出す。

昭和34年4月25日(書窓展):天涯茫茫生(横山源之助)『日本之下層社會』、田島象二訳編『西國烈女傳』(150)

昭和34年6月25日:小山内薫(主宰)『七人』4号、山田美妙『飄世女装の探偵』、中村星湖『影』、その他2~3点。芝美術倶楽部では不買?(187)

昭和34年7月5日:大和田建樹『いざり火』(192、195、處川堂出品) ※“古書店”は“古書展”の誤記。

昭和34年7月15日:坪内雄蔵『作と評論』、『早稲田文学』明治43年7月特大号、自著『恋愛の殉教者』など(201)

昭和34年7月25日:堺利彦(主宰)『社會主義研究』(明治39年)2-4号、木下尚江『野人語』1-3、塞士比亞[シェイクスピア](板倉興太郎訳)『自由の塔豪傑一世鏡』[Coriolanusの訳](210)

昭和34年7月30日:南翠外史(須藤南翠)『春の夢』(214)

昭和34年8月25日(ぐろりヤ展):『新思潮』創刊号、『芸苑』バラで8冊(231、235、豊川堂出品) ※“古書店”は“古書展”の誤記、“文学堂の好意によるところ大”だったらしい。

昭和34年9月10日(中央線古書展[荻窪会館]):『社會主義研究』1-5号全冊揃(247-48、平沢書店出品) ※豊川堂に斡旋依頼。

昭和34年11月5日:(“一信堂並びに文学堂の好意”で)『七人』4冊、(籤引きで)リットン(益田克徳訳、若林珪蔵記)『夜と朝』全12冊揃(281)

昭和34年11月15日(入札古書展[寛永寺]):大急ぎで一巡(289)

昭和34年11月25日:ジョンソン(丈山居士[草野宜隆]訳)『王子羅西拉斯傳記』

2冊(296)

昭和34年12月5日：饗庭篁村『少むら竹』1-18、リットン(抱一庵主人[原余三郎]訳)『聖人か盗賊か』(300)

昭和34年12月15日：不参(302) ※目録未着。

昭和34年12月25日(新興展)：不買(307)

昭和35年1月15日：坪内逍遙『新しき女』、雑書少し(320)

昭和35年1月25日：1~2の雑本(325)

昭和35年2月5日：田島象二襲訳評『新約全書評駁』3冊、山田美妙『識利文妙な依頼』(329-30)

昭和35年2月25日(“駿河台古書<sup>平冊</sup>[展]”[東京古書会館での古書展のこと])：高橋五郎述『女權眞説』・フェヌロン(加藤幹雄訳)『警世奇話』(文学堂出品)、(丁臈良[W. A. P. Martin]著・嘉魯日耳士[Christopher Carrothers]訳)『天道溯原解』全3巻(明治7年)(338-39) ※『天道溯原解』明治8年版は筆者も古書展で実見している。『日記』注釈ではフルベッキ(G. H. F. Verbeck)著・高橋吾良訳『天天道溯原』(明治18年)となっているが、表題も(一字だが)違っているし、版年もかけ離れているから、本間の購入した『天道溯原解』とは別本であろう。なお、『天道溯原』には中村正直訓点『天道溯原 全』(倫敦聖教書類会社、明治13年)もある。

昭和35年3月10日(荻窪展)：不参(344-45)

昭和35年4月5日：『屋上庭園』二の巻(358、中村屋出品)

昭和35年4月15日(グロリア<sup>しごろりや</sup>展)：英国雑誌 *The Punch* (進省堂出品)、『東京日日新聞』(明治8年2月7日)1枚、武島羽衣『美文論霓裳微吟』(詩集)、ソホクレス(内村達三郎訳)『悲劇王オイデポス』、ボッカシオ(長田秋濤訳)『西洋花こよみ』等(363)

昭和35年5月15日：『明星』7冊、雑本(375) ※堺枯川編『社会主義の詩』は入手失敗。

昭和35年6月5日：英国雑誌少し(384、進省堂出品)

昭和35年6月15日：吉川靈華《王右軍》(半截、文雅堂出品)、(正岡子規宛)天田愚庵書簡一通(文行堂出品)(385) ※“古書店”は“古書展”の誤記。

昭和35年7月5日：『明星』明治39年1月号(文学堂出品)、森林太郎『黄禍論梗概』、(近藤堅三訳編)『常西洋英傑傳』、イプセン(森嶋峰[菅太郎]訳)『社会之敵』(386、時代や出品)

昭和 35 年 7 月 16 日 (“駿河台古書展”) : 不買 (392)

昭和 35 年 7 月 30 日 : 大和田建樹編『歌謡集』上下 2 冊 (続帝国文庫)、『早稲田文学』92 号[大正 2 年 7 月] (397)

昭和 35 年 8 月 25 日 : 加藤弘之『人權新説』、井上角五郎 (琢園) 立案・福地源一郎 (櫻癡) 手稿・手塚猛昌編『張嬪』、徳田秋聲『足迹』、小川未明『廢園』、『早稲田文学』明治 40 年 7 月号 (407)

昭和 35 年 8 月 30 日 : 不参 (410) ※『續明治文學史』下巻の草稿訂正のため。

昭和 35 年 9 月 5 日 : 不参 (413) ※下痢気味のため。

昭和 35 年 9 月 25 日 : 不参 (419) ※気分が悪かったため。

昭和 35 年 12 月 25 日 (新興展) : 徳富蘆花書簡一通 (431、文行堂出品) ※“喘息の発作”による体調不良のため、使いを出す。

昭和 36 年 2 月 25 日 : 『いらつめ』、『明星』4 冊 (459)

昭和 36 年 5 月 30 日 : 『簡易生活』5 冊揃 (友愛書房出品)、雑著 2 冊 (475)

昭和 36 年 6 月 5 日 ? : 雑誌『美術文庫』創刊号 (明治 36 年 6 月) (486)

昭和 36 年 6 月 15 日 : (Richard) Muther, *The History of Modern Painting*, 4 vols.; (Charles) Mill[s], *History of Chivalry & the Crusades* [*The History of Chivalry* と *The History of the Crusades* との合冊版] (480-81)

昭和 36 年 6 月 25 日 (グロリア展) : 『早稲田文学』10 数冊 (484) ※使いを出す。

昭和 36 年 10 月 5 日 (書窓展) : J. A. Symonds, *The Renaissance in Italy* (488、491、大山堂出品) ※不参のため郵送依頼。

昭和 37 年 1 月 15 日 : “収獲なし” (505)

昭和 37 年 1 月 25 日 : 煙山専太郎編『無政府主義』(508)

昭和 37 年 2 月 5 日 : E. W. Gosse, *Henrik Ibsen*; George Moore, *Letters* (511) ※本間は『手紙集』としか書いていないので、*Letters from George Moore to Ed. Dujardin, 1886-1922* (New York: Gaige, 1929)、*Letters of George Moore*, introd. John Eglinton (Oxford: Sydenham, [1942])、*Letters to Lady Cunard, 1895-1933*, ed. and introd. Rupert Hart-Davis (London: Hart-Davis, 1957) の 3 種のどれかを特定するのは困難。

昭和 37 年 3 月 6 日 : (Wilkie Collins 著・原抱一庵訳)『白衣婦人』、武田仰天子『酒造奴』(515)

昭和 37 年 12 月 19 日 (入札古書展[芝の美術倶楽部]) : “一つも入札したきもの

なし”(540)

昭和37年12月25日：“雑本数種”(542) ※与謝野晶子短冊(文行堂出品)は籤引きで外れ。

昭和38年6月上旬?(荻窪展):森田恒友“版画集会津風景五葉”入手失敗(553-55) ※後に時代やから購入。

昭和38年6月22日(東京古典会展[上野清水堂会館]):坪内逍遙“『案山子』画讃”落札失敗(554) ※後に一誠堂から購入。

昭和38年8月25日(“駿河台古書展”):不参(577) ※目録注文品が全て籤引きで外れたため。

昭和38年9月5日:川上音二郎一座『ハムレット』・『ロメオとジュリエット』筋書き(明治時代)、雑誌『卓上』(大正4年)、(河野廣道編)『平徳評論と随想』(昭和24年)(582、時代や出品)

昭和38年12月13日(文車展<sup>みぐるま</sup>[白木屋]):西川光次郎『人道の戦<sup>上</sup>カールマルクス』(反町弘文荘出品)、上田敏筆“小唄の画帖くづし”(八木書店出品)[『續明治文學史』下巻465に原稿写真掲載]、齋藤与里筆(上田敏訳詩画讃)“淡路島”図買約(595) ※この時の白木屋(後の東急百貨店日本橋店)での文車展(文車の会主催)は第2回で、“史上最大の祭典”をキャッチフレーズにした前年5月29日-6月3日の第1回「古書籍大即売フェアー」(画期的なデパート古書展だったが、丁度この時期の『日記』には欠落があり、本間の反応は窺い知れない)に引き続き、大規模なものだった(『五十年史』219、566)。目録もB5判からA4判へと拡大した。なお、問題の第2回文車展の会期は昭和38年12月13-20日だった(『五十年史』220)ため、本間は初日に来場していたことが明白となった。この古書展は、三笠宮の来場など、“新聞の大々的報道とあいまって、古書ブームの先駆的な役割を果たした”(『五十年史』220)とされているが、『日記』には14-20日の記載がないため、2日目以降の本間の反応は不明。

昭和39年6月15日(新興展):記載なし(611、614)

昭和39年9月23日(一誠展入札下見):“外山正一のシーザー訳の原稿”を一誠堂に落札依頼(637)

昭和39年9月26日(“駿河台の古書展”):井上哲次郎・有賀長雄(増補)『改訂哲学字彙 全』(639)

## 2. 古書店

### (1)東京

## (i) 千代田区神田 (概ね神保町)

- 一久堂書店(“一久書房”) : (吉岡哲太郎宛) 尾崎紅葉書簡 2 通 (395、書店持参)、その 1 通『日記』注釈では明治 22 年 8 月 8 日付け[早大本間文庫所蔵]としているが、文脈から見て、別の 1 通と見ざるをえない) と (吉岡哲太郎宛) 幸田露伴書簡との交換およびトルストイ (内田魯庵訳)『イワンの馬鹿』(395、書店持参)、宮崎湖處子『妻君の自白』(398、書店持参)、413
- 一誠堂書店 : 高安月郊『ねざめぐさ』; 生田葵山人 (葵)『富美子姫』; 大塚楠緒子『晴小袖』; 森しげ『あだ花』; (三村竹清宛) 森鷗外書簡 (115、119)、132-33、140、235、242、(加藤弘之)『進化学より観察したる日露の運命』(『續明治文學史』下巻 20 に表紙写真掲載); 幸徳秋水『長廣舌』(285)、雑誌『評論』2 冊; 『城南評論』7-12 号 (307)、(金子薫園宛) 川村清雄書簡; (笹川臨風宛) 上司小剣書簡; 『演劇画報』、『演芸画報』とは別明治末期~大正初期のものなどバラで 12~13 冊 (307)、329、雑誌『アカネ』不揃 7 冊 (330)、352-53、426、477、片山潜『我社會主義』; 平民社同人編『社會主義入門』など買約 (542)、坪内逍遙“『案山子』画讃”(553-54)、(長塚節宛) 伊藤左千夫書簡 1 通買約 (628)、637、外山正一の Shakespeare, *Julius Caesar* 訳稿 (639) ※大正末期から『一誠堂古書籍目録』などの目録発行 (『五十年史』582-84)。
- 大屋書房 : George Saintsbury, *Corrected Impressions* (329)、George Saintsbury, *The Earlier Renaissance*; Rablais の英訳作品; その他 2~3 冊 (447)、Saintsbury, *The Earlier Renaissance* (450-51)、Bohun Lynch, *Max Beerbohm in Perspective*; (Hans Holbein 挿絵) *Erasmus in Praise of Folly* (477-78)、K. L. Mix, *A Study in Yellow* (568)、William Gaunt, *The Aesthetic Adventure*; William Gaunt, *The Pre-Raphaelite Dream* (589-90)、英書 (664) ※戦前 (昭和)、『大屋書房古典籍目録』発行 (『五十年史』579)。
- 小宮山書店 : 小栗風葉著作 13 種一括の入札依頼 (112)、風葉著作落札失敗 (114)、“明治文学上重複せるもの及び雑本数種”売却 (149-50)、“雑書整理、少し”売却 (217)、自著『文学雑記』(242)、329、“雑書少し”売却 (333)、352、“重複せる明星、新紀元其他雑書”売却 (505)、“年来珍藏せる書籍二三”売却 (554)、“雑誌雑書など少し”売却 (615)、628、660
- 進省堂書店 : 363、367、384
- 崇文荘書店 (“崇文堂”) : “英書目録[中略]中にチョーサーのものにつき一見”したいものがあり、出かけてみたが、希望のものと異なり、不買 (255)
- タットル(Tuttle) : Richard Le Gallienne, *Sleeping Beauty & Other Prose*



*Fancies*: Richard Le Gallienne, *The Quest of the Golden Girl*: Mary Shelley, *Frankenstein* (408)、Jules Lemaitre, *Literary Impressions* (463)

●東邦書店<sup>[明]</sup>:『平民新聞』9葉(331)

●明治堂書店(小川町):ミル『自由之理』;福澤諭吉『學問ノススメ』(初編、再刻)16冊(100)、Matthew Josephson, *Zola and His Time* (196、198)、杉村縦横(廣太郎)『七花八裂』(300)、Gleeson White, *English Illustration* (362) ※明治堂の古書販売目録『文献』(昭和3年創刊)は“古書目録史上に不滅の足跡を残した”(『五十年史』576)という。

●悠久堂書店:663 ※戦前、『悠久堂書店古書販売目録』発行(『五十年史』587)。

(ii)神田以外

●一信堂書店(練馬区豊玉北):280-81

●うつぎ書店<sup>しほ</sup>(杉並区阿佐ヶ谷南):247

●木内書店(文京区本郷):高橋義雄『日本人種改良論』(137)、斯邁爾斯[スマイルズ](中村正直訳)『西国立志篇』(303) ※戦後、目録発行(『五十年史』590)。

●時代や書店(世田谷区[「解説」43で“大田区”となっているのは誤り]上馬):“風俗の錦絵其他”(124)、小澤打魚<sup>櫻井</sup>『<sup>櫻井</sup>哀怨』;嵯峨のやおむろ(矢崎鎮四郎)『無味気』;中村吉蔵<sup>新井</sup>『<sup>新井</sup>牧師の家』;田岡嶺雲『屈原』(200)、201、『芸苑』1号;(ロード・リトン[牟婁李敦]著・織田純一郎訳)『<sup>道</sup>花柳春話』;田山花袋『第二軍從征日記』;富樫蟠神(寛次郎)『<sup>べん</sup>の<sup>の</sup>擔保の肉』;自著『生活の芸術化』三徳社版(334)、『城南評論』5冊(341)、386、河上肇『人生の帰趣』;Émile Zola) 堺枯川訳『子孫繁昌の話』;幸堂得知『さゝきげん』(聚芳十種[第九卷])(415)、森田恒友“版画集会津風景五葉”(553-55)、582、山岸荷葉翻案『沙翁悲劇 はむれつと』(610) ※昭和10年代から目録発行、勝本清一郎の馴染みの店(『五十年史』586)。

●尚美堂(台東区上野[下谷黒門町]):周延《洋装貴婦人図(音楽練習)》(112-14)、198

●處川堂(文京区駕籠町):192

●進省堂(文京区関口町):S. H. Butcher, *Harvard Lectures on the Originality of Greece* (415)

●大山堂書店(文京区本郷):488、491、Edward Berdoe, *The Browning Cyclopaedia* (661)

●都立書房(目黒区八雲):堺利彦・森近運平『社會主義綱要』(380) ※『日本古

書通信』掲載目録で注文（店主持参）

●夏目書房（豊島区西池袋）：辰野隆・本田喜代治『フランス自然主義文学』（170）

●波多野<sup>〔宛〕</sup>巖松堂（板橋区志村）：83

●平沢書店（中野区弥生町）：247

●広田書林（台東区上野[下谷黒門町]）：『演芸画報』大正初期（本間の寄稿文のある号のみ）9冊買約（114）、118、坪内逍遙が徳富蘇峰に贈った二幅（160）、198、325、『演芸画報』大正期4冊（326）、堺枯川大色紙（378）、“古き軸箱一個”（467）、474、518 ※大正末期から戦前まで『広田書林売品目録』発行（『五十年史』580）。

●文学堂書店（新宿区上落合）：235、281、（Eugene Sue 著、二愛亭花實・淡々亭如水合訳）『<sup>情話</sup><sub>奇話</sub>人七癖』（明治18年）1-9（本間は“明治十七年刊”と書いているし、冊数も多いので、国会図書館本とは違うシリーズかもしれない）；眞山青果『憂』；江見水蔭『<sup>情話</sup><sub>奇話</sub>ばんざい』（285）、338、386 ※代表取締役の内藤勇氏からは、本間が着流しで来店していたことや、古書会館では吉田精一・人見円吉（東明）・勝本清一郎らと古書収集にしのぎを削っていたと聞いている。

●文雅堂書店（文京区本郷）：385

●文献堂（新宿区戸塚町）：山田珠樹『ゾラの生活と作品』、吉沢義則『室町時代文学史』元版（191）

●文行堂書店（台東区上野[下谷黒門町]）：112、（“絹金地の扇に白楽天の詩を書”いた）坪内逍遙書（129）、尾崎紅葉選句；正岡子規漢文書簡；眞山青果書簡（129、171）、198、222、坪内逍遙大色紙（325）、378、385、431、467、474、482、489、（大橋乙羽宛）尾崎紅葉書簡（515）、井土靈山“小品”（518）、542、川上冬崖画幅（577）、小杉放庵書簡（579）、611 ※戦前（昭和）、『文行堂古書籍目録』や筆蹟物を中心とした目録『短冊』など発行（『五十年史』579）。本間「追憶あれこれ」（立正大学英文学会機関誌『英文學論考』2輯[1961年]）には、早稲田大学と立正大学で先輩同僚だった（また古書愛好・収集者でもあった）勝俣銓吉郎絡みで文行堂への言及がある。

●豊川堂書店（杉並区下高井戸）：231、247、344

●麦書店<sup>〔宛〕</sup>（世田谷区代田）：『早稲田文学』10数冊（505） ※書店持参。

●早稲田進省堂（新宿区戸塚）：Arthur Symons, *Studies in Seven Arts*; A. R. Hope Moncrieff, *Classic Myth and Legend*（502）、David Hannay, *The Later Renaissance*（640）、書店持参）

- 店名不明(渋谷区):“雑本数種”(304)
- 店名不明(東京?):金子堅太郎『日露戦争秘話』(195)  
(2)東京以外
- 壺中庵書店(神奈川県川崎市):『新体詩林』第4号(明治19年);川路柳虹短冊(239)
- 甲文堂書店(山梨県甲府市朝日):『早稲田文学』明治40年5月号;『新選女大学』(『萬朝報』明治30年1月15日付録);佐野天聲『不死の誓』(78)、315
- 日光堂書店(愛知県名古屋市中区東郊通):山田美妙『<sup>異</sup>劇ふたり女』;徳田秋聲『凋落』;『青年文』2巻3・5号;『小天地』2巻8号(72、77)、『愛国公論』4-5号(621、景山英子論のため、『日本古書通信』掲載目録から電話注文)
- 川合文庫(京都府京都市北区小山初音町):内田魯庵『巡礼記』(315)
- 思文堂<sup>(墨)</sup>(京都府京都市下京区古門前大和大路東入・西寺町松原下ル):尾崎紅葉書簡4枚(222) ※終戦翌年から目録発行(『五十年史』590)。
- 臨川書店(京都府京都市左京区今出川加茂大橋東入):Edward Bellamy(堺枯川[抄]訳)『百年後の[新]社会』再版(390)[『續明治文学史』下巻120に表紙写真掲載、ただし「挿画目次」では初版と明記]、幸徳秋水書簡(460)
- 高尾書店(大阪府大阪市北区曾根崎上):Edward King(夢柳居士演義)『<sup>満</sup>千金憂世の涕涙』;吉岡徳明『開化本論』2冊[最近の古書展目録では18000円];福本誠『日南子』(144、150)、306、315 ※戦前『高尾書店 絶版書目録』発行。
- 中央堂書店(大阪府大阪市旭区大宮町):『早稲田文学』明治41-43年11冊(383)
- 萬字堂書店<sup>(墨)</sup>(大阪府大阪市北区梅田町):与謝野晶子『舞姫』;岡本かの『<sup>た</sup>ころきねたみ』;岡本かの子『愛のなやみ』;福澤諭吉著作8種;『モザイク』創刊号その他(114、119)、“文化展に必要なもの約十種(「明治大正文学書目」所載のもの)”注文(127、結果未詳)、『虎嘯新誌』(492)
- 店名不明(甲文堂か高尾の可能性が高い):麻侯禮(Thomas Babington Macaulay)原著[Warren Hastings](前橋孝義訳述)『印度奇観』再版、(春の屋おぼろ[坪内雄蔵])『<sup>墨</sup>京わらんべ』初版・再版、(坪内逍遥)『新楽劇論』(314-15)

## V. 文芸

文学者であった本間と文芸との関係全般について記述することは、本稿では全く

不要である。ここでは飽く迄も筆者の目に留まった諸点についてだけコメントする。

### 1. 詩歌

本間が島崎藤村や与謝野晶子のロマン主義詩歌を好んだことは既知の事実であるが、『日記』で寧ろ眼を引くのは漢詩文関連である。“漢文亦読むに容易ならざるあり。余にして尚且つ然り。次の時代の者、愈々漢文の書に遠ざかるに至らんか。歎くべしとなす。”(644)と本間は記しているが、これは(故由良君美先生も言っておられたように)漢学が当然の素養となっていた明治までの世代の慨嘆とも言えよう。まさに“明治は遠くなりなけり”というわけである。以下、具体的に漢詩文関連を見ていく。

昭和34年1月2日に本間は志賀慎太郎(志賀謙早稲田大学名誉教授の父)から“董其昌の江南楽の書帳(石版)”を贈られている(72)。その奥付には“白龍山僧梵林識として「此卷用筆<sup>ハツ</sup>蕭」、云々の批評めける言葉”があり、“文久三年竹秋勸農日”とも記されていた。本間は当書を“[菅原]白龍が青年時代に董其昌を学べることを実証するものとして面白き資料”と評しているが、筆者からすれば乃木希典が明治10年6月9日に“谷[干城]少将ノ春竹ノ別邸”における書画会で“董其昌ノ画ヲ見”(乃木神社社務所編『乃木希典全集』[国書刊行会、1994年]上188)ていることの方が余計に関心を引く。日本における董其昌受容史という比較文学主題に関連して、白龍と乃木が結びついていたことも、筆者にとっては『日記』通読によって得られた思いがけない発見である。

“秉燭遊”——吉岡誓の依頼で扁額に揮毫し(171)、平田氏の米国留学に際して扇子に書き記し(213)、高津春繁の外遊に際して同じく扇子に書き記し(231)、『眞蹟圖録』遊び紙に書き記し、早大図書館の本間文庫にも扁額が所蔵されている——の文字は、註釈の通り、『文選』「古詩十九首」第十五首に由来している(後に芭蕉『おくのほそ道』冒頭部の出典にもなった李白「春夜宴<sub>二</sub>桃李園<sub>一</sub>序」[静嘉堂文庫所蔵の宋版『李太白文集』卷第二十七では「春夜宴從弟桃花園序」]に使用されていることでも有名)が、樂府「西門行」にも現れているため、どちらが先かは古来論議の種になっていることを付け加えておく必要がある。

昭和39年6月29日には、李白と同時代(盛唐)の詩人王維の五言古詩「藍田(山)石門精舎」を読んでいる(622)。

唐代の伝説上の禅僧・詩僧であった寒山・拾得への関心は顕著である。例えば昭和34年1月5日には、潮田武彦に“半折二枚(寒山詩)”を書き贈り、藤島秀麿に“色紙一葉(性月澄々朗云々)”——後出「大海水無邊」詩の末尾——を書き贈って

いる(74)。また昭和34年7月29日にも、自身<sup>いおづすけお</sup>と岩津資雄(歌人、国文学者)——“おなじ五十嵐[力門下の、親しかるべき筈の二人]——の間が“疎隔”したことについて、“寒山詩の所謂「大海水無邊、魚龍萬々千云々」の一節”を“眼のあたり”にした心地がしている(212-13)。興味深いのは、この寒山詩が坪内逍遙に關係している点である。そもそも逍遙は舞踊劇「寒山拾得」(『早稲田文学』明治44年9月)を公表しており、その中で問題の寒山詩を“大海の水に辺りは無きものを、寄り来る魚の千萬が”と大和歌に変え、それを水墨画ならぬ酔墨画に認めたのである(『酔墨畫譜 寒山拾得』[『眞蹟圖録』41]参照)。この書画については『日記』139-40に言及があるが、159-60に詳しい説明がある。それによると、本間は逍遙の酔墨画譜《寒山拾得》を2種所持していたことが判る。一つは大正15年か昭和2年の秋(『日記』159では“大正十五年の秋”、<sup>明治</sup>『明治文学作家論』「絵説説明」と『眞蹟圖録解説』13では“昭和二年秋”)の作(“逍遙選集刊行の折の打合せ会を芝紅葉館”で開いた際、“宴酣の頃”逍遙が興に乗って作したもので、<sup>明治</sup>『明治文学作家論』・『坪内逍遙』・『眞蹟圖録』等掲載)で、もう一つは昭和5~6年頃の作(徳富蘇峰の懇望により作したもので、『日記』139-40、159-60、273で言及されているもの、“雅印まで丁寧に押ししてあり”事実は酔墨ではなかったらしい)である。興味深いのは後者で、本間自身が逍遙と蘇峰の間で使者役を務めていたのである。ところが問題の書画を蘇峰は池上浩山人(側近の俳人、115にも登場)に与えていた。この事実を知った本間は、“せっかくの贈物を無下に他人に与へたる翁の心事、思へば不快也。余、両翁の間に立ちて使ひの役をなせるだけ、不快至極なり。”(160)と、いつもの温厚な本間にしては珍しく激情を吐露している。

本間は中国戦国時代の楚の詩人・政治家である屈原に強い関心を持っていた。現に田岡嶺雲の『屈原』と(屈原の代表作「離騷」が収録されている)『楚辞』を所持していた(252)。また、小澤打魚<sup>小澤</sup>『小澤打魚評釈』も所持しており、小澤の評釈は“独りよがり”で“少なくとも『離騷』と日本の詩歌との比較の如き特にその感あり”と評している(200)。

そもそも屈原との出会いについての詳細は不明だが、遅くとも中学生当時には(綱島梁川の批評「横山大観氏作「屈原」を評す」[『梁川全集』[春秋社、大正10-14年]7:70-74]ではなく)“高山樗牛の批評”——「画題論」(『太陽』明治31年10月20日)——を通して、横山大観《屈原》——いわゆる《朦朧体》の絵であることと、そのモデルが岡倉天心であることは有名——の存在を知っていた(534)。その後、一見したいと思っはいたものの、“絵は巖島神社の所有”であるため現地まで

出向いて見物するのは殆んど絶望的だったが、幸いにも“大観卒年画業回顧展(昭和二十四五年頃)に出品された”ため、本間は“始めて長年の渴を癒”した。その後、“美術院の回顧展”で再び見ている。三度目は、昭和37年10月10日頃に「生誕百年記念岡倉天心展」(日本美術院・東京芸術大学・朝日新聞社共催、10月2-14日、上野松坂屋)——従来全く知られていなかった天心の絹本着色画3点が陳列され話題となった——で見ており、同月14日(展覧会最終日)にも風邪を押して見ている。

他方、昭和34年9月19日には“『離騷』を読”み、“始めて靈華作『離騷』の画因を発見、欣喜雀躍”している(255)。また、昭和34年9月30日には「明治大正昭和三代美術展覧会」(朝日新聞社主催、上野松坂屋)で吉川靈華の大作《離騷》(大正15年)を見物しており、その“作品鑑賞”のため当夜と翌10月1日夜も『離騷』を再読している(262-63)。更に、昭和35年7月19日にも靈華展(東横画廊)で《離騷》を見物して、当作品を“正しく理解”しようと、帰宅後“屈原の『離騷』を読み直”したが、“夜、十時に至るも、遺憾ながら其解を得ず。却って徒らに、嘗つて其解を得たりと思へることの誤りなるを知”ったのである(393)。更に、翌20日にも靈華展に行き、会場で柏林社(書店)——“美術書肆として出発し[中略]はじめ出版を主としていたが昭和四年三月に『美術書肆柏林社古書販売目録』を発刊」(『五十年史』584)——の古屋(靈華に親炙)に逢い、《離騷》の出典を問いただし、“いさゝか手がかりを得”ている(394)。翌21日には、柏林社から『蕭尺木離騷図』(復刻本)が届いたが、靈華《離騷》の“解釈には何等役に立つところなく、失望す”ると同時に《離騷》についての“考案いよいよ纏らず”という事態に陥った(394、481)。翌22日には、早大図書館で、『列仙伝』他、《離騷》解釈に必要と思われる物を探したけれども“すべて徒労に終”った(395)。翌23日にも靈華展に行き、帰宅後《離騷》についての“参考書など何くれとなく見”ている(395)。昭和36年6月18日には、借用中の『蕭尺木離騷図』の序文と跋文を抜き書きしている(481)。“靈華のは大観のとは、屈原の性格描写においていたく異なるもの”で、本間は“この二つの屈原を比較せんと思ひ立”ち、“屢々『離騷』『九歌』『漁夫辞』などを読み漁”っていた(534-35)。

昭和37年5月2日には、“前進座の招待を受け”、読売講堂で“郭沫若作屈原五幕”を見物して大“感激”しており、“改めて『九歌』『漁夫の辞』等を読まんとするの念”を“しきり”にしている(522)。

この場合、ことは単に文学上の問題ではなく、“世溷濁”・“世幽昧以眩曜兮”という憂国の情すなわち政治上の問題でもある。そのことは本間の時代批評にも密接に

関連している。

なお、本間が歌人・歌学者の佐佐木信綱と直接面識があり、また外山正一の *Caesar* 訳稿の累代の所有者という点でも“奇縁”を感じていたことは、『日記』昭和34年5月28日・昭和39年9月26日の記載(167、639)から明瞭であるが、(母親が佐佐木の弟子だった関係で)佐佐木を直接見知っている石渡徳彌元東京都立短期大学長の話によれば、佐佐木は温厚な人柄だったらしい。また、佐佐木の書簡2通を筆者は先日入手した。

## 2. 美術

本間は美術にも通暁していた。『日記』には、“たゞ色彩を画面一画に塗り得々たるペンキ画式新画に数万円乃至十数万円を投ずるを誇りとせる[中略]今日の鑑賞界”にあって、美術品や画家に関する数少ない“具眼者”(385)としての興味深い記載が見られる。例えば“時代はいつとはなしに変化しつゝあり。今日、新しきもの、明日古きなり。たゞし、新しきもの、必ずしも芸術的に価値高きにあらず、古きもの、亦、芸術的に価値低きにあらず。芸術の価値は、時の古今を超越す。時の古今を超越せる作品にして、始めて永久に新なるを得べし。”として、“大観と玉堂との作品”——具体的には“玉堂の『暮雪』大観の『風濶々(兮)易水寒』”——“を以て、その例とすることに躊躇せざるを覚”えている(605)点は、無難な芸術価値論と言えるが、Bob Dylan の(“Blowin’ in the Wind”と並ぶ)名曲“The Times They Are A-Changin’”や中島みゆきの『時代は変わる』と共通する時代認識の点で興味深い。また、『朝寝髪の香爐』——明智光秀が“坂本城を自ら火にして自尽”した折、“愛蔵せる銘器類を城と共に焼くに忍びず、それらを一纏めにして敵方の将堀秀政に贈”ったものという——についての“光秀の芸術愛の心、おくゆかしくもめでたし。”(372)というような評は、本間の“芸術愛の心”を良く表してもいる。

また、日本画の西洋化現象——“各自の特色を<sup>半出</sup>〔廃〕棄すること”によって“すべてを一色化すること”——を国際化と認識するのではなく、“各自の特色を各自發揮し、而し各自それを認知する”ことこそ“「国際的」の真の意味”とする、芸術の国際性認識(657)も傾聴に値する。特に世紀末文芸の重要な比較芸術的テーマ「西洋芸術と日本芸術の相関性(影響関係)」という視点に立つと、先ず日本への影響という点では、白木屋の浮世絵展覧会で見た“北斎のものにて西洋画の影響を受けたる浮(世)絵風のものに、仮名や落款を仮名にてわざと横ものらしく見せようとしたるものあるは面白し。かゝるふとしたる、通りすがりに書きたりと思はるゝところに、西洋崇拜の一端のほの見ゆるを以てなり。”(83-84)という北斎の西洋崇拜や、

“明治三十年代洋画における浪漫主義について” (84) の文章を作ろうとして“明治三十年代の洋画壇のこと、ラファエル前派の影響などについて” (85) 中沢弘光——その書簡(年賀状)を筆者は先日入手——に直接尋ねているといった記載が眼を引く(その後も本間は中沢邸を再訪しており[88、113、190-91]、青山祭場での告別式にも参列している[634])。

また、逆に日本からの影響という点では、早稲田大学創立 50 周年記念大講演会講演 (1932 年 10 月 22 日、大隈講堂)「浮世絵と英国芸術(幻燈使用)」(『早稲田大学百年史』3: 617)、実践女子大学夏期公開講座講義 (1959 年 7 月 21 日、実践女子大学)「浮世絵の英国芸術に及ぼせる影響」(『日記』203、206)、日本浮世絵協会講演 (1963 年 12 月 12 日、山一ホール)「浮世絵の英国絵画界に及ぼせる影響」(『日記』595) というように、本間が長年に亘って講演・講義していたテーマが眼を引く。

西洋から東洋に眼を向けると、漢詩文の箇所でも登場していた寒山拾得の主題が眼を引く。時代順に見ていくと、本間は 1959 年 6 月 28 日に「禅画・仙厓展」(朝日新聞社主催、東京・日本橋三越)で《[豊干・]寒山拾得[図屏風]》を見て、“大作『寒山拾得』六曲一双(聖福寺[博多]の宝)は七十三才の制作なりといふ。彼れの精力絶倫なる以て知るべし。[《豊干図》の]画讚に曰く世画有法、厓画無法、仏言法本法無法アートレス・アートの謂か。面白し。”と評している(189-90)。画法に囚われた“世画”とは異なり、画法に囚われない仙“厓画”の巧まない融通無碍性を看破した評言である。本間は 1964 年 8 月 19 日にも「禅画名作展」(東京・新宿伊勢丹)で仙厓作品を見ているが、“白隠のものは余、その趣味を解せざるを憾む。

仙厓のものは奇想天外のおもむきあつて面白し。”(631)と評している。これで見ると、本間は仙厓が《鶴亀図》賛で自ら認める“戯画”のような厓画の趣を理解する一方、白隠画の“趣味”を理解できなかったらしい。具眼者の本間が何故に白隠画の“趣味を解”できなかったのかは不明(まさに“*There's no accounting for tastes.*” = “蓼食う虫も好き好き。”)である——“白隠画の形象は隙なく閉ざされていて、強圧感を与える”ため“一般の美術愛好家に受け入れられにくい場合もある”(泉 武夫「近世禅画の成立——白隠・仙厓の無技巧」『<sup>白隠</sup>仙厓』、『水墨画の巨匠』第七巻[講談社、1995 年])ということかもしれない——が、この対照的な白隠・仙厓評に本間の性格を窺うヒントが隠されているのかもしれない。



本間は小川芋銭《寒山拾得》(“画帖くづし”)の画幅を所持していた(77、117、171)。また、芋銭の《二仙》(酒井三良箱書き)——恐らく“寒山拾得を描けるもの”——を見て、“初期のものなれど面白し。”とも評している(140)。

本間は川合玉堂の《寒山拾得》を所持していた(山下昌子「本間久雄先生の思い出」『教育者としての本間久雄』161-62)。

本間は1959年7月30日に絵画展(上野松坂屋)で小杉放庵の《寒山拾得》を見ているが、“放庵の寒山拾得の如き、「寒山拾得」と題しあるにより、しか思ふのみ。この画題なくんばたゞ唐子の遊び居れるを見るのみ。”と評している(214)。(同様のことが中村不折の《寒山拾得》[弘和洞『書画目録』21号[平成22年春]16]についても言えよう。)また本間は1960年4月26日にも「放庵六十年画業展」(高島屋)——“近頃の気持よき展覧会”——で放庵の《寒山拾得》を見ており、“『寒山拾得』につきての二図([中国の天台山]国清寺)共に、この作者の心境を窺ふに足れり”(368)と記し、“この作者又和歌をよくす。”として、“山寺の春の日永となりにけり寒山拾得来たれ遊びむ”・“この石に不思議こそあれ月夜には寒山拾得来て遊びゆく(太湖山画讚)”などを“誦するに足れり”と評価している。なお、放庵の寒山拾得観については、『唐詩及唐詩人』(書物展望社、昭和14年)6版(昭和17年)490-93参照。

本間は1959年10月14日に児島善三郎——その書簡(年賀状)を筆者は先日入手——自選展(銀座松屋)で児島の《寒山拾得》を見ており、“一九四四年の作『寒山拾得』の如き南画の古名画を見る如きおもむきあり。筆触大胆、賦彩又濃厚、往々にして鐵斎を連想せしむ。”(270)と評している。

洋画家としては、和田英作関連記事(73、84)、青木繁書簡の手写(493-96)、萬鉄五郎関連記事(273-74)も眼を引くが、特に関根正二と村山槐多に関する以下の記述が眼を引く。

[昭和35年9月8日] 午後、妻同伴東横[旧館7階画廊]にゆく。関根正二、村山槐多(異色作家)展を見るためなり。[中略]関根正二は明治三十二年生大正八年没、享年廿一。槐多は二十九年生大正八年没二十四才。前者は福島県にブリキ屋[半農の木端葺き職人]の子として生れ、後、深川に移住して生活の苦勞をつぶさに嘗めたる人なりといふ。『神の祈り』、『信仰の悲しみ』、『姉妹』<sup>[弟]</sup>其他六点の出品いづれも生活苦の感滲み出で、観る者をしておのづから襟を正さしむ。これこそ異色作家中の異色作家なり。後者は、特に感心せるものなし。

たゞ『湖と女』の一点見るに足る。(414)

関根と村山の異色性は、(オスカー・ワイルドに親近感を抱いた) その世紀末性と夭折にある。因みに関根はワイルド(本間訳)『獄中記』(新潮社、明治 45 年)を大正 4 年 11 月 16 日の日記に抜き書きしており(酒井忠康編『関根正二 遺稿・追想』[中央公論美術出版、1985 年]20)、村山も山本二郎宛書簡(大正 3 年 5 月 5 日付け)の中でワイルドに言及している(村山槐多『村山槐多全集』[彌生書房、1963 年]401)が、関根の作品を見て本間が“襟を正”していたという事実は興味深い。筆者も画集ばかりでなく福島県立美術館で実物を見ているが、関根の作品を見て“襟を正”すということはなかった。“襟を正”すという印象は(村山の従兄である山本鼎が“白昼鬼気に触れる気”がすると評したことを考慮すると)一般的なのか、それとも本間の性格を表象しているものなのか。因みに筆者にとっては、(関根の顔立ちが茶目っ気あり親しみを覚えさせるものに見えるためか) 関根の作品は寧ろ神秘性・ユーモラス性・土俗性が印象的である。西洋の世紀末画家(特にゴッホ)の影響が強いことは周知の事実だが、ゴーギャンの影響も強いと見られる。関根に関心を持つ筆者は、先年、福島県白河市搦目の関根生誕地を訪れたことがある。写真で見られる生家の面影は(土方定一が訪れた時とは違って)既になく、ささやかな生誕地碑が関根勇(正二の父親の兄弟の曾孫)氏邸前に設置されていた(何の連絡もせず、突然訪れたにもかかわらず、勇氏父子にはお世話になり、近くの菩提寺[松林寺]にある関根家墓所を案内していただいたり、正二の写真が飾られている部屋で、東京では窺えない地元ならではの正二や近隣に関するゴシップ談も窺ったが、公表は差し控える)。なお、その折に白河市立図書館楼上の静かな閲覧室で(蟬の声を耳にしつつ扇風機と自然の涼風に身を曝しながら)関根を中心に郷土資料を漁った(その後、福島市立図書館・県立図書館でも郷土資料を漁った)が、その結果、関根をもっと郷土性・土俗性という視点から見直す必要があると判断しており、そのような視点からの論文をいつか発表したいと考えている。

日本画家としては、先ず田能村竹田に関する以下の記述が眼を引く。

[昭和 37 年 8 月 20 日] 妻及びヒロシ同道車にて三越にゆく。久美子も来る。余は今日より開催さる竹田展を見んとてなり。

余、竹田を好むこと久し。その繊麗なる線描、その高雅なる渴筆及び墨潤、共に愛すべく、その超脱温藉の人柄に至りては余、敬慕、其辞の極るを知らず。陳列されたる作品大小約八十点。中に就きて、大幅松巒古寺図、松泉山水図、

軽舟読画図、桃花流水図、曲溪復嶺図、稲川舟遊図、横幅秋溪訪友図など、余をして其前に立ちて徘徊去る能はざらしめたり。

竹田の作品には、知己のために描けるもの多しと聞く。現に松巒古寺図の如きは[頼]山陽の囑によりて筆を採り、苦心慘憺図漸く成りて山陽すでに亡し。竹田、更にこれを、おなじ風雅の友、青木木米に贈らん〈と〉して、木米又亡し。竹田、又、これを篋底に収めたるまゝ没しぬ。竹田の嗣子、これを木米の嗣子に贈りたりといふ。かくの如き今日の画家などに見るを得ざる画家気質とす。今日の画家の多くは画商のために筆を採るなるべし。画商の手より誰人の手に移るかは彼等の知らざるところ、又、知らんとも欲せざるところなるべし。彼等の多くは、画商に使役せらるゝ画工のみ。artist に非ずして Artisan なり。竹田展を見て、特にこの感深し。(526-27)

本間は既に戦前に「竹田の言葉」(『美之園』昭和7年9月)を発表し、“今日の画に最も欠けてゐるものは恐らくは、「画品」と云ふこと”で“竹田の所謂「形似を専らにし利を図る者」が滔々風をなして、高枯の風豊を供へた画家が、次第に影をひそめてゐる”と指摘していたが、竹田の絵画に“高雅”を見、人柄に“超脱温藉”を見ている点は、そのまま本間の志向を表象している(早稲田三尊の一人で、早稲田大学[名誉]理事であり、『日記』118にも名前が現れている市島謙吉[春城]も、竹田の“画品の高い処”を認め、“広く天下に飲ばるゝ様な画は、自分の本意とする所でない。識者で無ければ、理解が出来ぬ妙が、即ち自分に於ても妙とする所だと云うて、頼山陽一人の外、何人をも許さなかつた”点に言及している[市島春城『藝苑一夕話』[早稲田大学出版部、大正11年]下109-10])。竹田のような文人画家(artist)と“今日の画家の多く”がそうである職人画工(Artisan)の区別は、「アーティストかアーテザンか」(『早稲田文学』大正元年9月)に既に現れていたが、そのまま本間の当代——資本主義時代——の画壇批評となっている。今から20年以上も前、筆者は大分県竹田市に滝廉太郎旧跡と滝作曲「荒城の月」のイメージ源である岡城址を訪れたことがあるが、その折に竹田荘を(外観だけだが)実見し、やはりその簡素・高雅に感じ入ったことがある。

菱田春草に関する以下の記述も眼を引く。

[昭和38年1月16日] 午前中寸暇をぬすみ東横にて春草生誕九十年展を見る。『落葉』『黒[き]猫』を始め、その傑作、佳作一堂に集る。眼福也。たゞし、文字通りの寸暇一瞥なれば眼福を恣にするを得ざりしはうらみなり。『菊慈童』は

往年、国立博物館にて一見せることあり。其折は構図面白しと思ひたれど、今日見るとき、構図、並に材料拮据の態度において疑問とするなしとせず。そは背景と人物との調和を欠きたればなり。背景は菊慈童の伝説に従ひて描かれたれど余りにも写實的なるため、仙童菊慈童の背景として相応しからず[。]この

図、恐らく東洋的理想主義と西欧的写実主義との相剋とも見るべきか。『蘇李決別』(三十四年作、『菊慈童』は三十三年作)は所謂朦朧派の代表作の一に数へらる。今日見て必ずしも新らしとは云はざれど、線描第一の其当時としては確かに新らしく、それだけに毀誉褒貶まちまちなりしなるべし。蘇武と李陵との相對せる構図も面白く、忠節に身の榮華を忘れたる蘇武が白鬢白髪、形容の枯槁せるにかゝはらず、却つて毅然として面を挙げ居るに反し、弓矢を持ち、立派なる装ひせる李陵が面を下げ、真正面より蘇武を見る得[能]はざる様、この場合の二人の心中を描写し得て妙といふべし。李陵は、蘇武と同じく漢帝の寵を受けたるものなれども、夙くより匈奴に降りて身の榮華を謀れる軽薄才子なり。蘇武を同じく匈奴に降らしめんとして、蘇武を説得に來り、却つて蘇武の忠節に恥づるところありしならん。二人の心理を描き得たところ面白し。

『王昭君』(三十五年作)又大作なり。余はこの作を以て場中第一の傑作となす。王昭君を含んで二十余の女性の群像描写なり。先頭に立つ王昭君の悲みに充てる諦観的表情、袖に涙をかくして別れを惜しみつゝ王昭君に従ふ二人の女性、少し離れて群れる女性たちが、さゝやき合ひ、批評しながら、王昭君の匈奴に送らるゝを見送るところ、これら女性群の顔の表情の一々異なれ(る)は、實際凡手に企て及ぶところにあらず。流石に春草なりと感服す。小品ながら『歸樵』は面白し。明記なけれど、何年の作にや。恐らく明治三十年年代初頭のものなるべし。この当時の田園趣味を髣髴たらしむも文化史的に珍とすべく、而も詩味横溢せるは特に愛すべしとなす。(552-53)

《菊慈童》(初め明治33年4月の第8回連合絵画共進会に《菊壽童》の題で発表)は、伝説(周の穆王の侍童が山に流され、そこで菊の露を吸って永遠の若さを得たという)に基づくもので、発表当初、諸新聞で酷評された日く付きの作品である。因みに綱島梁川も“春草子に至つては今度は殊に振はない。「菊壽童」の如きも、前回の「紅葉秋潭」に比していたく劣つてゐた”(『雑俎集』『梁川全集』10:432)、“「菊壽童」などの山水物もいづれも成效に近い作”(『東京美術院派評判記』『梁川全集』

7:184)と評している。構図的には“背景と人物との調和を欠”いている感もあるが、背景が本間の指摘するほど“余りにも写實的”とは思われない。なお、子供絵を得意とした田中針水(川合玉堂に師事)の絹本画《菊慈童》(弘和洞『書画目録』21号[平成22年春]17)の写実性(金太郎のふくよかさ)と比べてみても、春草の《菊慈童》の幽玄性は一目瞭然である。

《蘇李訣別》は、題名に從えば“蘇武は義人、自分は売国奴”(中島敦「李陵」という李陵の心理変化——その結果、「李広蘇建伝第二十四」(班固『漢書』中巻「列伝」I)では明白に説得を試みているのに対して、「李陵」では“降服勧告については到頭口を切らなかつた”ことになっている——には相応しいが、筆者の眼には寧ろ《蘇李会見》の印象の方が強い(会見後でなくとも、会見前から、李陵が蘇武に対して心理的負い目を抱いていたことは想像に難くなく、現に“李陵は恥じて蘇武を尋ねて来ようとはしなかつた”[本田濟 編訳『漢書・後漢書・三国志列伝選』、『中国古典文学大系』13[平凡社、1968年]12]という解釈もある)。“蘇武の忠節”——中島敦の歴史小説(単なる歴史小説ではなく見事な心理分析を示した)「李陵」に從えば“漢節を持した牧羊者”——に対して李陵を“輕薄才子”とする本間の評価は、(李陵を“国士”[「李広蘇建伝第二十四」・「司馬遷伝第三十二」])として弁護し宮刑に処された司馬遷や(「李広蘇建伝第二十四」に依拠して李陵の行為を“「やむを得なかつた」と同情的に見る)中島敦とは正反対で、意外である。本間は「李陵」を読んでいなかったのであろうか?

春草の女性描写の細やかさについては贅言を要しまい。因みに《王昭君》は日本絵画協会・日本美術院第12回連合絵画共進会に出品され、銀牌第一席(最高賞)を受賞した作品である。本間は既に昭和34年7月30日に「清流会展」(兼素洞、東京・京橋)で安田鞠彦の《王昭君》を見て、“その線描と賦彩と構図”(214)に注目していたが、春草の《王昭君》にも注目したことで、本間の内包していた慕わしい女性像の解明に資するかもしれない。

《歸樵》(絹本着色、制作年代不明)は春草画集には掲載される機会が少ないため、春草作品の中では寧ろ知られていない方に属する。そのような中で、吉澤 忠『菱田春草』、『日本近代絵画全集』16(講談社、1963年)は、《歸樵》を掲載している点で有り難い。制作年代は不明だが、吉澤は“「朦朧体」をぬけ出したころ”と見ている。“詩味横溢”を“特に愛すべし”とした本間の感性は良く理解できるが、“この当時の田園趣味を髣髴”させる点で“文化的に珍”とまで言えるかどうかは疑問である。

筆者にとっては、(樋口一葉の既出「雪の日」に通じる)《落葉》六曲一双(第3回

「文展」[明治 42 年]出品、二等賞受賞)の静謐さと、(モンマルトルのキャバレー Chat Noir とそのポスター[スタンラン作]、Edgar Allan Poe の短篇 “The Black Cat”、竹久夢二の絹本画《黒船屋》などに連なる)遺作同然の《黒き猫》(第 4 回「文展」[明治 43 年]出品)の世紀末性(柏の枝のアラバスク性、柏の葉の金泥)が、春草作品の中では最も印象的である。春草作品を好む筆者は、先年、主として日夏耿之介の足跡を辿りに長野県飯田市を訪れたことがあるが、その折に飯田城の桜丸跡に立つ「桜丸御門」(通称「赤門」、飯田市立中央図書館脇)を見物したり、その前の道路向こうの出丸跡に立つ飯田市立追手町小学校(日夏や春草の母校の末裔)のクラシックな外観を眺めたり、二の丸跡に立つ飯田市美術博物館で春草作品を見たり(ついでに空堀跡に架かるコンクリート橋を渡って、本丸跡に立つ「日夏耿之介記念館」・「柳田國男館」の内部も本館員に鍵を開けてもらい見せてもらった)、仲ノ町の春草生誕地や(日夏の墓と同じく飯田駅近くの柏心寺にある)春草の墓を実見したりした。春草生誕地には記念碑が殺風景に建っているだけで、昔を偲ぶ便は寧ろ近所(二本松)の天満天神社や「糸桜の歌碑」だったが、近所に一際異様な家屋があり、偶々傍にいた人に尋ねたところ、遊郭の跡だと知らされ、春草と遊郭という組み合わせに意外な思いをしたことがある。春草は梅毒に罹っていたらしい(横山大観『大観画談』新版講談社、1968 年[98]が、二本松に遊郭が設置されたのは明治 25 年で、春草上京後(東京美術学校在学中)のことであり、幼少期との関りはない。その遊女屋も今では姿を消したという。以上、記憶を飯田市美術博物館編『飯田城ガイドブック』(飯田市美術博物館、2005 年)によって補ったが、見物しそこなった場所が多いことを改めて知らされ、当書がもっと早く発行されていたらと残念でならない。

「近代絵画上の『役の行者』」稿執筆のために手堅くも川端龍子邸を訪問していること(118、関連データとして 107、120 参照)、梶田半古関連記事(77、117、131、520)、小林古径(半古の弟子、本間の『<sup>美術</sup>近世唯美主義の研究』を装丁)——その書簡(年賀状)を筆者は先日入手——関連記事(476、493、521)、奥村土牛(半古・古径の弟子)——その書簡(年賀状)を筆者は先日入手——関連記事(478、520-21)、前田青郎(半古の弟子)関連記事(493)、堂本印象——本間は戦前から「堂本印象論」(『美之國』昭和 13 年 7 月)などを発表、その書簡(年賀状)を筆者は先日入手——関連記事(272、646、656)も眼を引くが、(明治期社会主義運動との係わりから)小杉未醒(放庵)と小川芋銭の関連記事は筆者には特に興味深い。先ず放庵関連記事は以下の通りである。

[昭和35年4月26日] 高島屋に放庵六十年画業展を見る。面白し。会場にて放庵氏[中略]に逢ふ。作品は洋画日本画合せて五十点。すべて氏独自の画境なり。氏に取り洋画と日本画はその製作の材料を異にするのみにてその画因はすべて同一なるものゝ如し。洋画にはシャバンヌを学びたる跡いちじるし。『山幸彦』(一九一三年)は青木繁の玉依姫と同じ題材なり。構図は青木の整然たるおもむきなけれど又、別種の味ひなきにあらず。『老子出関』(一九一四)は背景の重々たる山の描写其他、南画的風趣一面に横溢してよき出来なり。氏の洋画中余の最も好むところたり。日本画においては小品ながら『三笑』は構図、賦色共心にくき出来なり。柘榴、あけび、栗の実の笑みわれたるところを描きたるもの、「虎 蹊<sup>(ツツ)</sup> 三笑」などより思ひつきたるものか。『扇面二段張額面』として宗達、連月、一茶、一休、長明、丈山等を各扇面に描きたるは作者の興味の奈辺にあるかを察するに足る。『芭蕉詩境』蕪村の『春風馬堤曲』等はこの作者の文学につきての教養の如何に深きかを知るべく、又、『寒山拾得』につきての二図(国清寺)共に、この作者の心境を窺ふに足れり。近頃の気持よき展覧会なりし。この作者又和歌をよくす。

この春を山の一つ家ひとり居て何にかやなる鳥にかやなる  
 十月の山のみなみの日たまりはやまの子供も小鳥らもよる  
 山寺の春の日永となりにけり寒山拾得来たれ遊ばむ  
 この石に不思議こそあれ月夜には寒山拾得来て遊びゆく(太湖山画讚)  
 塹壕に春の雨ふる髑髏々々千人どくろ春の雨ふる  
 たゝかひのあとに草萌ゆいくはくの血脂の上に春の雨ふる(『江南画冊』のうち)

など誦するに足れり。(368-69)

[昭和35年4月29日] 再び高島屋に放庵展を見る。(369)

[昭和35年5月1日] 午後一時、小杉放庵氏を杉並区和田本町小杉二郎氏宅に訪ふ。氏の『戦(ひ)の罪』につき質すところあり。得るところ多大なり。氏の個人展覧会のこと其他語り合ひ二時近く辞す。(370)

[昭和35年5月17日] 早大図書館にゆき、[中略]上野図書館への紹介を依頼す。小杉未醒の『陣中詩篇』を同図書館にて探さんためなり。且つ洞[富雄]氏の調べにて、同図書館に右書のあることを確かめ、一先づ安心す。たゞし、果

して在りや否やは、愈々手に取りて見るに非ずんば明らかにあらず。午後、早速にも行かむと思ひ立ちたれど、一旦家にかへり昼食などすませたれば疲れ急に出てゝ果さず。(376)

[昭和 35 年 5 月 19 日] 上野図書館にゆき、小杉未醒『陣中詩篇』を借り出し、閲読。必要のところを抜き書きす。これにて漸く安心して文学史の稿をつゞくるを得たり。(378)

[昭和 38 年 8 月 11 日] 宇田川、依頼し置ける表装出来せしと<sup>平出</sup>[て]持参す。[中略]さらに放庵筆和歌小品二幅を依頼す。(572)

[昭和 38 年 8 月 29 日] 散歩がてら文行堂にゆく。小杉放庵の長文絵入りの手紙を買ひ求む。値、二千五百円也。画家としての心境を記せる点も面白く、且つ、明治文学史に挿入するも面白しと思ひたればなり。けだし、いさゝか道楽に過ぎたる心地なきにもあらず。(579)

[昭和 38 年 9 月 7 日] 旧稿、小杉未醒『戦《ひ》の罪』[中略]等を読みかへし、訂正[後略] (584) ※この訂正稿は、後に『續明治文學史』下巻第六篇第二章第三節(二)「未醒の『戦の罪』」として公表された。

先年、日光を再訪した際、筆者は小杉放庵記念日光美術館を訪れ、放庵絵画に見入ったことがあるが、今では印象が薄れてしまった。

(茨城県牛久沼畔に住み)河童画で有名な小川芋銭だが、筆者としては芋銭の東洋(中国)思想(老荘と桃源郷)と明治期社会主義運動との係わり(幸徳秋水などとも親しかった)に注目している。芋銭関連記事は以下の通りである。

[昭和 34 年 1 月 7 日] 夕刻喜多山表具師、兼て依頼し置ける森田恒友小品[中略]表装出来とて持ち来る。[中略]改めて芋銭寒山拾得、半古紙雛の二幅を頼む。(77)

[昭和 34 年 2 月 27 日] 午前中、喜多山表具師、かねて頼み置ける芋銭旧作寒山拾得(画帖くづし)持参す。よき出来なり。(117)

[昭和 34 年 3 月 18 日] 午前久我山の酒井三良氏にかねて依頼し置ける芋銭箱書を受取りに使を差出す。(127)

[昭和 34 年 4 月 5 日] 午後吉岡誓氏来る。芋銭、百穂を持ち来れるなり。芋銭の『二仙』(三良子箱)寒山拾得を描けるものか。初期のものなれど面白し。(140)

[昭和 34 年 6 月 3 日] 酒井三良氏に使ひを出す。同氏より依頼を受けみたる遣



遙先生幅の余の箱書を持参して、同氏に依頼し置ける芋銭の箱書（寒山拾得）を持ち来らしむるためなり。(171)

[昭和 35 年 1 月 24 日] 十一時吉岡誓氏、芋銭幅二個を携へ来る。一つは寒来りを樹上の梟一羽見守り居る図。他の一つはあけぼのの光りさし初めし空のあなたに梟一羽の高く天駆ける図なり。共に絹本。画の出来はどちらも面白からず。芋銭には出来不出来甚だ多し。この二幅は後者に属す。無論求めず。(324-25)

[昭和 35 年 8 月 23 日] 十二時、妻と共に三越[東京・日本橋]に芋銭[名作]展[日本経済新聞社主催]を一瞥す。作品、六十。すべて大作なり。而も大方は芋銭の中年より晩年にかけてのものにて、画家としての独自の風格の確立された後の作品なり。或ひは飄逸、或ひは蒼古、或ひは奇抜、或ひは閑雅、とにかく最近の最も見ごたへある展覧会なり。いづれ改めて再び見ることゝし二時七階にて昼食[後略](406-07) ※この展覧会は“没後二十五年もたった画家とは思われぬほど、多くのひとびとの注目をあつめ”、“芋銭没後まもなく開かれた「芋銭遺作展」以来、久しく待ち望まれていたこの企画は、思いがけぬほどの大きな反響を呼んだ”（鈴木進 編『芋銭』[日本経済新聞社、1963年]76、108）。

[昭和 35 年 8 月 26 日] 三越にゆき、再び芋銭展を見る[。]低徊去る能はず。(408)

[昭和 35 年 8 月 28 日] 午後三時三越にゆく。三度芋銭展を見るためなり。特にその『桃花源』の大幅を見むためなり。会場にて芋銭息洗二氏に逢ふ。夕食後『桃花源』の画因を知るために『画題辞典』『故事成語辞典』などを調ぶ。後者所載陶淵明の『桃花源記』によりて漸くその画因を知るを得たり。(409)

[昭和 35 年 9 月 10 日] 午<sup>平山</sup>[前]十時井出君女婿佐藤氏と連れ立ち来る。「芸術生活」の原稿を手渡す。芋銭展の『桃花源』のことなど語る。(415)

[昭和 35 年 9 月 20 日] 陶淵明桃花源の一節を記す[直前で陶淵明「桃花源記」大半を引用しているが、ここでは省略。芋銭画桃花源鑑賞のために。(416)

[昭和 37 年 4 月 25 日] 実践出講後、芝、美術倶楽部に行く。例の売立を見んとてなり。[中略]芋銭の名月等印象に残る。(520)

上記により“かねてから芋銭の絵に特別の興味を持つて[中略]遺作展も、欠かさず見た筈である”（「芋銭の『桃花源図』」『芸術生活』1961年1月）本間の芋銭に対する傾倒ぶりが如実に窺える（“わづか六日間の開催中、忙中の閑を盗んで三日間、会場に足を運んだ”[「芋銭の『桃花源図』」]とは驚きである）が、書斎の床の間に

芋銭画を飾っていた（「応接間に於ける本間久雄博士」『學苑』1953年3月；野中 涼「本間久雄先生の思い出」・井内雄四郎「An Old Familiar Face」『教育者としての本間久雄』144、147）という指摘も芋銭に対する本間の愛好ぶりを示している。芋銭画（というよりも絵画全般）の“出来不出来”に大して関心のない筆者としては、本間の芋銭画評について異を唱える積りは毛頭ない。画集だけでなく、「小川芋銭展」の東京展（東京国立近代美術館、1993年4月8日－5月16日、東京国立近代美術館・日本経済新聞社主催、興亜火災海上保険協賛）でオリジナルを見たことのある筆者は、芋銭画の童心溢れる明るさ・暖かさを強く実感したが、その代表こそ本間が特に意識していた紙本淡彩・屏風二曲一双の大作《桃花源》（昭和11年）であると言って良いであろう（芋銭には紙本淡彩・屏風六曲一双の大作《桃花源》[昭和7年]もある）。これは“芋銭郷里の近郷の某氏秘蔵のもので、”三越での“展覧会のために特に出品され”、本間にも“無論、初めての観ものであつた”（「芋銭の『桃花源図』」）。本間の《桃花源》評は、「芋銭の『桃花源図』」・「芋銭の『桃花源図』」について（承前 完）（『芸術生活』1961年1-2月）に詳しいが、筆者もこの画には特別な思い出がある。東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻修士課程に在籍中、筆者は芳賀徹教授のゼミに出席したことがあるが、まさにそのゼミで芋銭の《桃花源》が与謝蕪村に連なる桃源郷絵画の系譜で取り上げられたのだった。因みに、その時、教授の関連論文を批評したり《桃花源》を含む芋銭画について発表したのが筆者である（教授の指示で、ゼミでの発表用や教授の出張講義用に芋銭画等の写真を撮ったりもしたが、何故か出張講義用については失敗し、そのことを後日教授から電話で知らされ、お詫びした記憶がある）。後年、『近代日本社会運動史人物大事典』全5巻（日外アソシエーツ、1997年）の「小川芋銭」の項を、（教授とは立場が正反対の）筆者が執筆したのも因縁と言えようか。本間も《桃花源》を平民社の夢想する社会主義的理想郷（ユートピア）と結びつけて捉えている（「芋銭の『桃花源図』」について（承前 完））。

なお、「国語国字問題雑話」（『學苑』1962年9月）でも本間は陶淵明に言及している（ただし「飲酒」其五「結廬在人境」と「帰去来辞」）。

### 3. 演劇

秋田雨雀関連記事(277)については既述したので、ここでは土方与志(本名は久敬、ひさよし、演出家)関連記事を以下に引用する。

[昭和34年6月4日] 新聞夕刊に土方與志氏の死を報ず。惜き人なり。余、面識あり。昭和の初め頃と覚ゆ。築地小劇場にて講演を頼まれたる折、氏と面<sup>平田</sup>晤す。其後、昭和八年のこと。中央公論社発行の沙翁全集宣伝のため、同社の依頼を受け、余、森田草平氏と共に北海道にわたる。その船中にて、偶々新劇団を引きつれて同じく北海道にわたる同氏に逢ふ。余等の二等船客なりしに対し、氏は三等船客なり。氏の庶民的生活ぶりに対し、余、ひそかに敬意を表せり。氏の如く華胄の出にして敢て庶民の生活を厭はず、而も主義のためには入獄を辞せず、断々乎としてその信ずるところを貫けるは現代稀に見るところ、愈々敬するに余りあり。氏は最近「女優」に出演して島村抱月に扮す。扮するところの抱月は実際の抱月以上の高雅なる風姿なり。余、たまたまフィルムの抱月を通して再び氏の風姿に接す。これ余の氏に接せる最後なり。氏は享年六十一。まだまだのところ、痛惜に堪へず。(172)

“築地小劇場”とは、土方が師事した小山内薫らと共に1924(大正13)年に築地に設立した日本最初の新劇専門劇場および付属の劇団名。“新劇団”とは、小山内死後の分裂騒ぎで築地小劇場を脱退した土方らが1929(昭和4)年に結成した新築地劇団のこと。“華胄の出”とは、土方が土方久元(倒幕家、維新後に農商務相・宮内相など)の嫡孫で、伯爵位を持っていたことを意味する(その後、第1回ソ連作家大会に日本代表として出席し、日本の現状を報告したため爵位を剥奪された)。“入獄”とは、1941(昭和16)年に帰国(横浜上陸)と同時に逮捕され、懲役5年の刑で仙台刑務所に入獄していたことを意味する(服役中、敗戦により釈放)。主義を貫いた人物に対する本間の“敬意”は、本間の出身地である米沢の“そんぴん”気質(平田耀子「本間久雄論——前半生の人間関係を中心に」、中央大学人文科学研究所編『近代作家論』、研究叢書31[中央大学出版部、2003年])と関係があるかもしれない。なお、「女優」とは、1947年12月9日封切の東宝映画(脚本は久板栄二郎・衣笠貞之助、演出は衣笠貞之助)で、山田五十鈴が松井須磨子を熱演し、(映画初出演の)土方が抱月役で共演した。